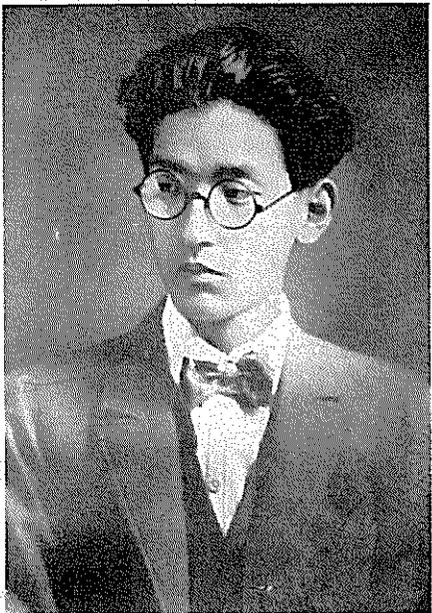


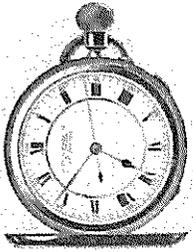
詩

集





河田
誠一
訂集



796
178

河田誠一詩集

目次

春 晴 藍
 江 戶 翁
 化 翁
 江 翁
 ある命望
 遊 心
 つめたき人に
 短 唱
 4 4
 過ぎゆく日
 田 天 の
 鼻 血
 さくら花
 さくら花
 さくら花
 残 雪
 燃ゆる村落
 三 三 六 五 三 三 三 三 三 三

風 樂 の 故 郷
 哭 ぐ
 南 方 哀 別 日 日
 春 の 港
 炎 の 天
 悲 慘 の 港
 三 三 三 三 三 三

河 田 誠 一 の 詩
 河 田 誠 一 と 私
 田 村 泰 次 郎
 井 上 友 一 郎
 装 幀
 草 野 心 平

春

タンサンの泡だつたらう海峡の空は
つめたく暮れた。

なまあたたかいかぜの記憶は
かすんだ雨のなく音

ポロポロの鳥

わたしの抱いてねたあなたの肉體は春であつた。

船鑑

燈臺をいだき

まひる海にしづむ人魚の妖艶なかなしみを思へ。

灯よ。

夜ごとむなそこにかんずる波のいのちに

戦火とほくひびく空間の耳に

春はおそろしき無を殺さむとす。

8

花石

いく目ぞ。

雨天のふかき朝夕をなげきむて

陽光を見ずにながき一週をすごしつづ。

何物か雨となりぬ。

9

かなしき四國の旅よりかへりて
赤きリボンもてかざれるカンカン帽をすてたり
わが家の植込に弟の持ち來りし江戸菊をにくしみ
つ近づけば
晴れたる今日はかなしげにも美しくみゆ
カラ梅雨の傘のよごれを洗はず
われらひとりなる夏を苦しみつ

昔、旅役者の淡い影法師を、田の路まで見つめてゐた
自分であつた。私は近くその一人として放浪のつ
めたさをつづける。

時は春

東京はとほくなつた。鼠火の目をとちた小猫が生
れた。
あの人あの友、みんな忘れてゆく。
しづかな春よ
胸の火はあかく燃えさかる。

重々し。かくは明るくのどけき晴日に
わがあたまたま重々し。

かなしき一年の都會の生活をすてて
我が家の少なき家族にさかる
君はすでに去りてかへらず

海よ山よ

わかれし日の君が着物のみふりかへらずゆきし君

のころよ

物云はて、母と過さむ數日の後
かくてながきながき放浪に出でんとす。

つめたき人々

つめたき人よ

雪のごとくつめたき人よ、

われはそのごとき人を幻にいだきて

わが前にひざまづく肉を見つ。

あはれ、つめたき人にあらざりしたみよ、

つめたく痛き心もてわれを射殺せざる心よ、

つめたき人よ

氷のごとくかたくつめたきひとよ、

きたりてわれをなぐれ、

なぐらるるいたみにわれもしたかば

紙のごとき女はとほく去らむ。

夏朝

眼に青葉

こころは雨に

うらぶれて

朝寝の夏の

どんぞこ時雨

由に日がてる

青々と

すみ切つて

16

晴れたとてかなし

君のなき

重きこころのいく日つづく

17

オイ

戸を開ける。

オイ

戸を開ける。

そとは月夜の暗れた空だ。

なんにもうごいてるないんだ。

オイ

着物をぬいで出て見る。

そとはすばらしい死の世界だ。

オイ

女はバカだぜ。裸で歩いてるで自分でしらない。

オイ

死んでくれる。

外はすばらしい月夜だ。

ひるころ雲が流れ去つたよ
そして俺は顔を洗つた

あいつのこゑももうとほくなつたやうだ
俺の耳にきこえる一日の音響は
單調な船の軸ごゑだ

裏の家で鶏の産卵がはじまつてゐる
バカなことだ

さうしていつがくればカラリと暗れたこころにな
れるのだ

このまま一生がすぎてゆく？

それは耐へられないことだ

それならば俺はいまでも死んで見せる

雨天の

はるぼると歩みゆかむ哉
はるぼると歩みゆかむ哉

忘れきし萬年筆を

君が農村の静けき住居の疎林のあたり

雨天の

雨天の

雀のごとくおろかにも

ぬれて矣天のほこりのなかを。

花のなき一夏

都會の友のいかにあるらむ。

わたしはおまへとながくわかれてゐるのがさびしい。

わたしはおまへの生ぬるい感觸にひたるのがすきだ。

都會の雑踏の中のおまへを思ふ。あの時ハンカチをくれた路傍の少女をおもふ。

三時間の激論のはてに出たおまへの黒さよ。

お前が俺の鼻からホタリと落ちる文明的な音

俺は舊の枕もとに洗面器の中によくおまへを見出

した。

そしてかなしくなるのであつた。

そのかなしくなるのがすきであつた。

おまへと長くあはない。

おれの生活のモノトニイがおまへにあいそをつかしたのか。

モノトニイ

オイ、モノトニイを殺してくれ。誰か誰か！

見てはならないものを見た。ねざめの汗ばみの中にもえさがる火に、時代の潮流と大陸の臭氣と野天のひかり。

思へばそれもほのかな白日夢に置かれた自分の周囲であつたが、
自分の驕であつたが。

女を殺すさくらの花は火龍だつた。

フラフラとうかんだ女の肉體をはづかしめようと

して

蟲！ああ臭氣ふんぶんたる蟲の結晶に嫌惡を見た。

夜をこめて、月のあかりに流れくる
海の妖魔のおそろしさ
かかる道何故にすすみえざるや
海邊の家の夜をこめて

25

かくてこそ
いまだもみざるくらがりに
秋の鼠のくるさもにくく
東洋のレギイネ!

おろかなりし海にもたれ
いまははやゆくへもとほく
われがゆくなれ

26

ある日

あはれなる女と子との色あせし寫眞を見出しぬ

今日

あらず すももはひらく

わが母を生みすてゆきし祖母はおろかなる女なり

かくていくたび嫁しゆきしことぞ

孫二人 あはれなる戀をしたれば

春はくるしきものとなりたり

ここに 残雪のごとき鋭きいたみをいだきて

あいするものはかへらず

夏ちかし

いまもなほあふひの花はさきたり

ガラス戸の中にある田舎の町の寫眞よりもさびし

きは

ほこりにまみれたるそれよりかなしきは

あはれなる女と子といたまじき寫眞の

残雪のごときすすまじきかなしみなり

人間がアミトバであつた時以來
鶴が鳥であつた時以來

炎天はいまにもかはりあらざりしならん

われ、一日、太陽の寂寥になきやまさりしことのあり
たれば

月蝕の臭き春は暮れたり

國境にひくく雨の山脈を俯瞰しつゝ

自動車は骨のごとき人間をのせて下りぬ

されど、わがごとき心重き足どりぞ、

夏はやく葦の彼岸をはさみて想へば

ああ苦行の溪谷のそこふかき花の群落の
碧潭のまひるをおほひたり

火の花よ

美しく素朴なる少女は裸體となりて水浴みせり

それは、何の花かしらねども

わがゆけば、いまはいづこも燃ゆる村落に見ゆ

わが戀にやぶれて、うらぶれし白日夢とも見よ

夫のごとき女ぞ、わが朝夕に缺きたれば

われは孤獨となりぬ

あれが二人であるいた最後であつたねえ。
おお、レギイネよ。

はつたつの人生の嵐は熱い碧空から下りて来た、
おまへの着物の裾と俺の古びたレエンコオトのす
そ。

しがみついて哭いて明かしたおまへのこのろの電
波が俺の旅出をものうくした。

おまへには何も無い。

(内親も、金も、ああ本當のプロレタリア)

あの道をどうしていつまでもいつまでも
すべての物質や義理と闘はなかつたかに哭けてく
る。

あれが俺の一生の苦惱であつた。

都合への狂奔と、故郷への叛逆。

いつまで俺はそのために、なぜそのためにたたか
ねばならないのか！

レギイネ！

俺は故郷に吹きあげるかぜほこりを涙で泥にした

おまへを考へる。

おまへは食ふために、どうして働いてゐるのか？

それを問ふのをやめよう。

俺はけふもまた一つの國境をこえた
おまへのからだと俺のからだ……
おまへのいのちとふれのいのち。
明日はまた俺は暗い溪谷を走らねばならない

哭く

自動車のなかで 夏のはじめの涼しいかぜにぬれ
麥畑中の山道をゆられてゆく。
その朝 とある町に自動車をすてて歩みゆく家は
とほく

陽光は淡い灼熱となったよ。
わが家をはなれてなくなくあいつの家にはたずん
だ俺。
ほんやりとあいつは泪ぐんでゐたところだつた。
ほんやりと

さうだ。いまもほんやりと考へに沈んで居らう。

トミよ。

けふは一日中おまへのまぼろしを忘れようとして
海で遊した。

沖の島かげて釣つた魚がどんなに可憐であつたか。
夕ぐれに

俺たちは釣をやめて魚を放つた。

あとで 俺は悲しかった。

母よ、トミを呼びもどして下さい。

ぼくと母と弟との三人の家族

俺は どうしたらいいのでござらう母上。

あいつは父も母もないひとりぼっちだ

あの可愛い女はぼくの朝夕のいのちだつたに。

今夜は蛙が啼かない。

月もない。

ほんやりと あいつはまつくらの空を眺めてゐる
だらう。

I

波止場の臭い今治のお堀の午後のキヤツチボオル、
繁草屋にちかい家の奥さんは
親切におちついた道をおしへた。
青葉と紙の燈籠
いまははやにごれる物貨のほこりと軌柱に
臭い臭い海の黒さとほこりを拾つてゆく。

II

ゆふぐれいたみにはれた眼をあげて
松山の城をのぞみぬ
すてにくらき街の電車は
東京の車掌のごとき不親切さを見ず
道後！ 道後
さやかにいてゆにひたり
おろかなるねむりになけり。

III

われはかのフチなし眼鏡の女中の
美しからざれど
色白くやさしき日本の禮儀を見たり。
小さき温泉の町は

かくも田舎の風呂のごときかな

III

繁つた山懸、雨けしのやうにあかい櫻、飛沫

大寄附のほりを三里

雨かせしだいにすすしかりけり

源末利加歸朝の紳士の會話が齷切れのよいびき

をつたへてうしろの楯をみはらせる

雨よ

人間はあまりにふかい山間と溪谷を見下し

死蛇曲りの人どほりなき

ふかい山中にふみて入る

となりに居たる少女の聲あまりにおとなしく氣品

ありしを午すぎ

大淵にちかく降りてゆけり

ものがなしきあわただしきをいまもいだきて

卵の町のささやかなるとほりの人ごみに

雨もまたあわただしくふりて来りぬ

春の港

ち色の夕のそら

おびえた おとろへたころをいだいて

さびしくなくなるとなだめてわかれた

港のまぢのひと

小さなこびびと

苦惱に死んだオレのころの暮に

ゆふべゆふべの祈りを捧げる

みなとの 晴れわたつた春の日

東京の かせのきびしい日に

肺がうつろになり

げくるげくるとうごめくものが

心のつまつてゐるふくろを蝕んでゐるんだ

俺のころにうかんできてくる港のまぢのふるさとに

どつかで どちらがなり

ばあんとあがるつかれたパツション

いまこの花壺にいううつの花が咲いたが

そのいろに映ずる 船 船

港 いううつにすすけたみなど

あの人の船がもう あの港の存をたづねないので
あらうか

晴れわたる初夏の午前に
眼覚めて疎林と畑の彼方 海をのぞめば
君をはるぼる炎天の下にたづね來しわれの涙ぞ。
顔洗ふころ重たく
その夕 歸れば わが家に一人なる母は泣きてあ
りたり。

遂に 物を疊にぶちつけてすすりなく母。
われはただ われのころをかなしめども
夜ははや蛙啼く海ちかき田舎町をふけつつ君をお

もふ ころはいかにくるしきことぞ。

かくて 君をしてわがそばを遠ざけし母はかなし
げに

君を淫賣婦とののしりぬ

父母のなき ただひとりなる君

君 わがもとをさりゆかば いかにあるらむ

母よ。

炎天の夏の町とならむとす

東京の友は くるしくたよりかきて

もはやわれの歸京を強ひずとなきて來りぬ

ホツネンと祖母と二人 考へに沈める君をおもへ

悲惨のみなとに行け
春ふけし夜をこめてゆけ
街々の酒は苦く、船宿の女は美しからず
されど、赤黒き愛欲の
つめたく重い花のいのちになかむ

哭くは人にあらざりき
燃ゆるは火にあらざりき
かくて夫のごとき人のみゆけ、悲惨の港

うるはしくなつかしき悲惨の港
われ、かの港にて犯せし殺人の罪科の追放にあまん
じ

いまより後、苦惱をしほる牛を飼はむとし、大陸の沙
漠にゆかむとす。

河田誠一の詩

田村泰次郎

河田誠一が死んだのは、昭和五年二月三日である。二十四歳であつた。早いもので、もう七年間の月日が流れた。

河田は中學時代から詩を書いてゐた。昭和四年春、彼は志里香川縣仁尾町から上京して、早稲田第二高等學院にはいつた。そこではじめて私たちは相識つたのである。翌五年の春、彼は歸省中突然四國放浪の旅に出た。それは後でわかつたことであるが、彼はある女の人との事情から帰るにつて、この界に出たものであつた。この旅行が彼にとつてどんなに苦難に満ちた長い暗いものであつたかは、旅の途上、自分の肉體に刺青をするやうにして行くささささで書きつけた「放浪時稿」と題する、いま私の手もとにあるかすばらしい一冊のノートを讀つてみる。その女性に彼の従妹に當る人で、幼いときから二人の交情はどつしなわけだか、彼なからには

るされなかつた。けれどもこの女性も、彼が高松市の郊外で最後の息をひきとる瞬間まで傍を離さなかつたほど、彼にとつては終始絶對の對象であり、その短い生涯の精神史を決定づける最も大きな存在である。母とこの女性との間に立たねばならぬ彼の苦惱は、その瑰麗な詩の全體に剛柔のやうに散らばつてゐる。

河田の詩の中には採彩を極めた南方の風物が到るところに歌はれてゐるが、六年前の早春、彼の死の直後、恰も彼の死を運ぶやうにして、私は帆船に乗り、實地にそれらの風光に接した。その無上の覺醒を夢を育んだ彼のいはゆる怖い船窓の海や、文明を忘れた南の風や、黒潮の酒や、石炭の出る島の海嶺道跡や、その土地に住む、夜の愛してやまなかつた古代埃及の彫刻「エレスの神女を淨む」にあるやうな島のやうな顔つきをした人々に接して、私は一人の豪華な魂を持つた藝術家の内面を飾るむしろ單純なまでの條件に、ある脆弱な衝動は立ちくらまずにはゐられなかつたのである。

あの内海に面した赤土の山ふところの海岸に低い瓦葺根の軒を並べた静かな仁尾の町の、海の匂ひの満ちた明るい酒會の間の路次や、堤割や、鹽田に鈍い早春のうすら陽の照らしてゐた風景は、生涯私の臉のうらから消え去ることはない。

河田が詩を書いたのは、大體として昭和六年のはじめ頃までで、私の手もとに残

つてゐる詩はその船頭のものが多い。私は詩のことはよくわからないが、しかし二十歳前後の年齢でこのやうな詩を生んだといふことは、一つの驚異にも似ない。昭和七年日に、やうやく河田の遺稿詩集を出すことの出来る我々の喜びは何ものにもかへがたい。

終りに、製版その他のことで御好意を頂いた草野心平氏に感謝する。

河田誠一と私

井上友一郎

河田が亡くなって、もう七年になる

私は當時の悲しみを思ひだしても、いまだに胸が痛くなるのである。

子供の時から色々な友人はあつたけれども、河田と私の交遊は、寧ろ親しく交つてゐたといふ以上には、生涯の仕事を通じての友達だつた。つまり私から云はせると河田と深く交れば交る程、それだけ仕事の上でも勉強になる、といふ風な具合であつた。いい友達とは、いつの場合でも、これだと思ふ。これではなけれどワツだと思ふ。

私にとっては、さういふ頓打のある友達を失ふことが、世の常の無常感とは一應別だ。せよなに大きな損失であつたかは、おそらく他の人にはよく分るまい。私の悲しみといふものが、いつまで経つても、深く且つ新しいのは、さういふ氣持から

も来ると思ふ。

けれども、河田との交遊の何年間かは、私自身の生涯には、まことに美しい記憶である。有難すぎる記憶である。それは、あつて存在した事實であり、そして私自身の生涯の記憶のなかには、消えることなく生きてゐる事實である。私は、この事實を限りなく愛したい。

河田が、美しい心を持つた詩人だつたといふことは、もう私はここには書かぬまい。

それはこの遺稿集が充分語つてくれることと思ふ。ただ残された私たちが無力で、この遺稿集を世に出すことの遅れたのを、一途に申しわけなく思つてゐる。

けれども、河田の美しい魂のうたごゑは、かういふ詩集の公にされないう前から、常に私自身の心の耳に、絶えることなく響いてゐたことを再び加へよう。

私によつて、それは再び表ふことのない、天上の心の糧である。

796

145

昭 泰 社 版

